

『ハットウシリ 3 世の弁明』における「愛」 —「愛」を意味するヒッタイト語の表現について—

山本 孟

日本学術振興会特別研究員(PD)

同志社大学一神教学際研究センターリサーチフェロー

要旨

ヒッタイト王国は前 2 千年紀のアナトリア中央を中心に栄えた王国である。前 13 世紀のヒッタイト王ハットウシリ 3 世が作成した『ハットウシリ 3 世の弁明』という文書には、王と王妃ブドゥヘパの「愛」について述べられる箇所がある。本稿では、この文書において王と王妃の愛が語られる理由を、ヒッタイト語で「愛」と訳される語の用例から考察する。愛にかんする語の用例には、男女の関係としての「愛」と支配者の関係としての「愛」がある。このことを踏まえると、ハットウシリとブドゥヘパの「愛のある関係」とは、イシュタル神の力で異性として惹かれ合い、夫婦として調和のとれた様子を意味したと理解される。加えて、政治的文脈で使用される用例からは、支配者たちが契約関係を結ぶための法的根拠となる術語であったこともわかる。したがって、『ハットウシリ 3 世の弁明』にみられる「愛」とは、愛情をもった夫婦であることを示すと同時に、ハットウシリ 3 世が政治的なパートナーとしてブドゥヘパの高い地位を法的に認めるために言及したものと考えられる。

キーワード

ヒッタイト王国、愛、ハットウシリ 3 世、ブドゥヘパ、『ハットウシリ 3 世の弁明』

“Love” in *Apology of Ḫattušili III*: A Study of Some Hittite Words Meaning “Love”

Hajime Yamamoto

Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science (PD)

Research Fellow of Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

Abstract:

The Hittite text known as the *Apology of Ḫattušili III* (CTH 81) mentions “love” between the king Ḫattušili III and his queen Puduḫepa. This paper reveals the reason their “love” was narrated in the text from an analysis of the usage of Hittite words that indicate “love.” Their love, which was granted by the goddess Ištar/Šauška, shows how they were attracted to each other, and in harmony, became husband and wife. In the political context, love between rulers was cited as legal act, therefore in Ḫattušili III and Puduḫepa case, it justifies the couple’s binding in a political partnership. Thus, with the inclusion of episodes describing their love, Ḫattušili III might had intended to show the legal recognition of Puduḫepa’s high status in the Hittite royal family being almost equal to that of her husband as well as to show that their affection was indeed granted by Ištar.

Keywords:

Hittite Kingdom, Love, Ḫattušili III, Puduḫepa, *Apology of Ḫattušili III*

1. はじめに

紀元前 17 世紀半ば、アナトリア中央（現在のトルコ共和国）に成立したヒッタイト王国は、前 12 世紀の初めに都が放棄されるまで、約 500 年間続いた王国である。20 世紀初頭に開始された王国の都ハットゥシヤ遺跡の発掘からは、これまでに 3 万点以上の楔形文字粘土板文書の断片が出土している。1915 年には、これらの粘土板文書の多くに記されていた、インド・ヨーロッパ語であるヒッタイト語が解読されたことで、ヒッタイト王国にかんする研究が本格的に始まった。都の遺跡から出土した楔形文字粘土板の大半は、祭儀文書などの宗教に関連する文書であるが、王の業績を記した年代記や臣下に対する布告、ヒッタイト王と他国の支配者間で交わされた外交書簡や条約など、歴史的な文書も数多く見つっている。

そのような文書からは、ヒッタイト王国の歴史上、大きな政治的権力をもった王妃がいたことがわかる。なかでも前 13 世紀後半の王ハットゥシリ 3 世の妻ブドゥヘパには、王である夫に並ぶ、非常に強い存在感があった¹。たとえば、ブドゥヘパは、ヒッタイト王ハットゥシリ 3 世とエジプトの王ラメセス 2 世が条約を締結した際、夫と並んで条約の書板に調印をしている。また、この条約の締結後、ハットゥシリ 3 世の二人の娘がエジプトのラメセス 2 世と結婚しているが、外交書簡からはブドゥヘパがヒッタイトを代表して娘らの結婚の交渉を取り仕切っていたことがわかっている²。彼女の王家における存在感はその姿を描いた図像からもうかがい知ることができる。トルコ中部のカイセリ県に残るフラクティンのレリーフでは、王ハットゥシリ 3 世と王妃ブドゥヘパの図像が並列に描かれ、それぞれが嵐の神と太陽女神に捧酒をしている。さらにブドゥヘパは、ハットゥシリ 3 世の死後も「タワナンナ」というヒッタイト正妃の座にあり続け、息子トゥドゥハリヤ 4 世の治世においても、その権力を発揮していた³。

ハットゥシリ 3 世は、自らの幼少期からクーデタによって王座に就くまでの半生を語る、『ハットゥシリ 3 世の弁明』（以下、『弁明』）と呼ばれる文書において、ブドゥヘパとの出会いと結婚の経緯を語っている。この文書は、これまでにオッテンとファン・デン・ハウトによって、それぞれドイツ語と英語に翻訳されており⁴、また文書の作成目的についても、他のヒッタイト王による王令などと比較しながら考察したインパーラティの研究などがある⁵。しかし、この文書の中で語られているハットゥシリ 3 世と妻ブドゥヘパの関係そのものについての研究はない。彼らの出会いと結婚は、ハットゥシリ 3 世がその半生を通じて受けたというイシュタルの加護の一例として語られているものと理解されるが、その言及が王家におけるブドゥヘパの立場とどのように関連するのには注目されていないのである。そこで本稿では、『弁明』に述べられるハットゥシリ 3 世とブドゥヘパの関係

としての「愛」という言葉に着目し、ヒッタイト語で「愛」を意味する語が二人のどのような関係を表しているのかについて考察する。これにより、彼らの愛が語られることの背景に、プドゥヘパが王と並ぶ王妃であることを認めようとする政治的なメッセージがあったことを明らかにする。

2. ヒッタイト語の「愛」

ヒッタイト語において、「愛」にあたる言葉には *aššiyatar* と *aššiyawar* という名詞がある。これらの名詞はいずれも動詞 *ašš-/aššiya-* の抽象名詞である。動詞 *ašš-/aššiya-* は、プーヴェルの辞書では「ほぼ中受動態の形で使用され（つまり状態を表すか、受け身の形で使われ）、意味としては「好ましい」、「親愛である」、「良い」であるとされている⁶。また、このように訳される *ašš-/aššiya-* は、形容詞 *aššu-* 「良い」が動詞化したものである⁷。このため、動詞 *ašš-/aššiya-* は「良い状態」を表しており、人の感情としては「好意のある状態」を表している。したがって、これに由来している名詞 *aššiyatar* や *aššiyawar* とは「好意」そのものを意味するのだと考えられる。ヒッタイト語のドイツ語辞書 *Hethitische Wörterbuch*（以下、HW²）の *aššiyawar* の項目では、この語がほぼ宗教的な文脈で使用されており、主に祝福の定型文のなかで神々に求められるものとして現れるのだと説明されている⁸。一方、*aššiyatar* の項目では、祝福の文言などの宗教的文脈に現れる「愛」だけでなく、それ以外の「愛」の種類がいくつか挙げられている。それによれば、1. *aššiyawar* と同様の「愛」、すなわち宗教的文脈における「愛」に加えて、2. 外交的文脈における「愛」、3. 夫婦の間の「愛」、4. 性欲を刺激するさま、性的なオーラなどがある⁹。本稿では、ヒッタイト王ハットゥシリ 3 世と王妃プドゥヘパの関係としての「愛」について、夫婦の「愛」に加え、性欲や外交的文脈における「愛」にも注目しながら考察する。

なお、ヒッタイト文書では、ヒッタイト語の文書内で使用されるアッカド語（アッカドグラム）の *NARĀMU* 「愛」が現れることがある。また、ヒッタイトの遺跡から出土したアッカド語で書かれた文書には、アッカド語の動詞 *rāmu* 「愛すること」と、その関連語が使用される例がある。ただし、アッカドグラムやアッカド語で表記される場合、それがヒッタイト語でどの語で読まれるべきか必ずしも判然としないことと、『弁明』ではハットゥシリとプドゥヘパの「愛」としてヒッタイト語の *aššiyatar* が使用されていることから、本稿では上に挙げたヒッタイト語彙を考察対象とする。

3. ハットウシリ3世とブドウヘパについて

ハットウシリ3世は、王ムルシリ2世の息子ではあったが、王位継承者に指名されておらず、王の座にあった自らの甥に対するクーデタを起こして王位に就いた人物であった。『弁明』では、幼少期から即位までハットウシリの半生に起こった出来事が、彼の個人神イシュタル（フリ語ではシャウシュガと呼ばれる）の導きであったという点が強調される。そのため『弁明』は、女神イシュタルの導きで王座に就いた経緯を説明することで、王位と息子トウドウハリヤへの王位継承を正当化するために作成された一種の法的な文書、王令であると言われる¹⁰。

その中で、ハットウシリとブドウヘパの出会いに言及されるのは、ハットウシリがイシュタルに参詣するためアナトリア南部の国キズワトナの都市ラワザンティヤに立ち寄った場面である。

KUB 1.1 + ii 79-82– iii 4 (CTH 81.A)

私はラワザンティヤに行き、女神（＝イシュタル）に捧げ物をし、女神に礼拝した…女神の命に [よっ] て、私（＝ハットウシリ3世）はサンガ神官ペンティシャツリの娘ブドウヘパを我が妻に取り、私たちは結婚した。女神は私たちに夫（と）妻の愛を与えた([*nu=n*]aš DINGIR^{LUM} ŠA^{LUM}MUDI D[A]M aššiyatar pešta)。私たちは息子たち（と）娘たちをもうけた¹¹。

女神イシュタルは、ハットウシリの個人神であると同時に、他の古代中近東各地の伝統と同様、ヒッタイトでも愛を司る女神と捉えられていた¹²。ハットウシリ3世は、このイシュタルの命でキズワトナのイシュタル神官の娘ブドウヘパを妻とし、「夫と妻の愛」が与えられた結果、子どもを得たのだという。

また、ここでは「結婚する」を意味するヒッタイト語の動詞 *handai-* が一人称複数で使用されている¹³。ヒッタイト語文書において結婚を言い表す場合、通常は単数で男性が女性を「妻に取る」という表現が用いられることが多い¹⁴。上の引用文でも、ハットウシリはブドウヘパを「妻に取った」というが、同時に「私たちは結婚した」とも表現されている。「整える、準備する」などと訳される動詞 *handai-* は、人間関係に対して使用される場合には人間の調和の取れた状態を表し、男女関係においては「結婚する」ことも意味し得る語である。王妃となったブドウヘパも、エジプトのラメセス2世へ送る書簡の中で、この語を用いて神々が彼女らを結婚させたのだと語っている。

KUB 21.38 obv. 57'-58'(CTH 176)

アリンナの太陽女神が、嵐の神とヘパト、イシュタル（と共に）＜私を＞王

妃にしたとき、彼女は私（プドゥヘパ）をあなたの兄弟（ハットウシリ）と結婚させた(*handait*)。私は息子たち（と）娘たちをもうけた¹⁵。

プドゥヘパも自分と夫を結婚に導いた神としてイシュタルを挙げ、結果として子供を授かった点に触れている¹⁶。ハットウシリとプドゥヘパによる結婚の説明は、イシュタルの導きで結婚し、愛情を抱き、子供を得たという点で一致している。ただし、プドゥヘパは三人称で女神が結婚させたのだという一方、ハットウシリがあえて一人称複数で結婚を語っていることから、一方的にプドゥヘパを妻に選んだのではなく、二人が主体的に結婚したことを伝えているように思われる。

4. イシュタルがもたらす男女の愛

aššiyatar と *aššiyawar* の用例において、男女の愛を表現している例は、神話や儀礼文書の中でイシュタル神との関連で現れることが多い。神話『ヘダナムの歌』では、次のようにイシュタルの能力が語られている。

KUB 33.88 rev. 8'-11' (CTH 348.I.4.A)

〔一方、イシュタルは〕浴場へ行った。〔ニネヴェの女王〕はそこで体を洗った。彼女は自らを洗った。彼女は […] した。彼女は上質の香りのついた油を自らに塗った。彼女は着飾った。すると、愛がまるで子犬のように彼女についてまわった(*aššiyatar*=*ma=ši UR.ZÌR*^{MES} *GIM-an EGIR-an huwayandari*)¹⁷。

この場面では、イシュタルがその魅力を使って海に住む怪物であるヘダナムを倒す計画を立て、体を洗って香料の入った油を塗り、ヘダナムを誘惑するため海へと向かおうとしている。その中では、「愛」が「犬のように」イシュタルについてまわったという比喩表現が現れる。これは一種のフェロモンや香りのようなものを指すと思われ、ホフナーは、この神話の別の箇所に見える *aššiyatar* を「惚れ薬」のようなものと解釈している。

KUB 33.84 ++ iv. 6'-7' (CTH 348.I.4.A)

〔イシュタル〕、ニネヴェの女王は […] を認め、「愛(*aššiyatar*) (惚れ薬?) と *šahi-*、*parnulliš-*を「強い」水に満たし、水の中で「愛(*aššiyatar*) (惚れ薬?) と *šahi-*、*parnulliš-*を嗅いだ(?)。ヘダナムはその香りを嗅ぐと、ビールと〔甘美な〕眠りが雄々しいヘダナムの心に優った。彼は雄牛やロバのように居眠りを始めた¹⁸。

HW²で指摘されるように、ここでの *aššiyatar* は性欲を誘発するオーラのようなものと考えられる。イシュタルが発している「愛」には、相手の関心を性的に引きつける性愛との関連が読み取れる¹⁹。

また、イシュタルがもたらす男女の愛は『イシュタルへの儀礼と讃歌』にも語られている。

KUB 24.7 i 38-47 (CTH 717)

男と彼の妻は愛し合い、彼らの愛を果たします(LÚ-iš=ma=kan MUNUS-ZU-ya *kuieš aššiyat[ari] nu=šmaš=kán aššiyatar ZAG[=š]an ar[nuzzi]*)。これはあなたイシュタルがもたらすことです。男がある女を誘惑し、その誘惑を果たす。これはあなたイシュタルがもたらすことです。[...] 甘美な油、そして喜ばしい。[あなたに] 愛される男のために、あなたは町 [の人々] を眠くさせ、彼を覆わせます。あなたイシュタルのおかげでこれらの [人々は] 何も聞くことはありません。

しかし [もし]、女が彼女の夫に憎ま [れる] ならば、[あなたイシュタルは彼女を] 憎ませます。[しかし] もし、[男が彼の妻に] 憎まれるならば、[あなた] イシュタルは彼らのために [...] を積み上げます。[彼ら／彼が...] そして彼が愚かな行い、(すなわち) 姦 [通をするでしょう]。彼らは駆け落ちするかもしれない [が...彼らを] 救わないでしょう²⁰。

1行目では、動詞 *ašš-/aššiya-*が中受動態三人称複数現在で現れ(*aššiyattari*)、夫婦が愛し合うことについて述べられており、性愛が連想される。次の恋人の男女の関係についても、イシュタルの力で男が女を誘い出すことに成功するのだとされる²¹。このように、イシュタルに「愛される」者(*[kuiš...] aššiyattari*)に与えられる恩恵が挙げられ、男女の性愛をもたらす女神の力が讃えられる。

次の段落は欠損が激しいものの、前の段落で示されている男女の関係の対極にある男女、つまりイシュタルに愛されない男女の関係が列挙されていると思われる。そこで先の段落に登場する「愛し合う夫婦」と対比されるのは「憎み合う夫婦」である。また、「恋人を誘惑する男」の対になるのは「姦通する男」、「町の人に知られず愛し合う男女」に対するのは、「駆け落ちをしても救われない男女」である。このことから、イシュタルがもたらす「愛」とは、性愛だけではなく、男女の仲の良い関係や周りから干渉されない、認められた関係であることも暗示されている。

同文書中、上の引用文に先行する段落には、イシュタルに「愛された家」についての言及がある。

KUB 24.7 i 12-17 (CTH 717)

私は、第一の女主人たるイシュタルのお供、(すなわち)ニナッタとクリッタ、シンタル・イルティ、ハムラズンナを称えなければなりません。イシュタルはイシュタルに愛される家(*nu=kan* ^D*IŠTAR-li É-ir kuit [ašši]yattari*)に彼らを送り、(面倒を(?)) 見せるからです。彼ら(=家の人々)は笑いながら仕事をします。彼らは楽しみながら家事をします。花嫁たちは結婚し、彼女らは機を織り続けます。息子たちは結婚し、畑を耕し続けます²²。

このようにイシュタル神に愛される家は家族の調和が得られるのだと述べられる。神話や讃歌では、イシュタルが男女の性愛と家族の調和をもたらす神とされている。以上の例からは、『弁明』では、イシュタル神の導きでハットウシリとブドゥヘパが異性として愛し合い、周りから認められる仲の良い関係であったこと、またその結果として多くの子供を得たのだという考え方が反映されているといえる。

5. 政治的文脈における「愛」

イシュタルの役割を考えれば、『弁明』でハットウシリとブドゥヘパの関係について、二人の愛がこの女神に帰されるのは当然のことと思われる。ただし、ハットウシリがあえて一人称で「私たちは結婚した」と述べ、二人の主体性を示している点からは、単なる男女の愛以上の関係を示そうとしていた可能性が考えられる。そこで本章では、政治的文脈における「愛」という観点から、ハットウシリとブドゥヘパの「愛」について考察する。

ハットウシリ 3 世と王妃ブドゥヘパの息子で、のちに王となったトゥドゥハリヤ 4 世が作成した文書に、『青銅板文書』と呼ばれる文書がある。これは、王トゥドゥハリヤ 4 世が、従兄弟でアナトリア南部の国タルフンタッシャの王であったクルンタと結んだ条約が記された青銅製の書板である²³。その中では、幼少期のトゥドゥハリヤ 4 世とクルンタの間に「愛」があったと記される。

Bo 86/299 ii 46 (CTH 106.1)

(かつて)私の父(=ハットウシリ 3 世)が、クルンタと私(=トゥドゥハリヤ 4 世)の敬意と愛を見たとき(*mahḥan ABŪ-YA ANA* ^{md}*LAMMA ammuq=a nakkiyatar aššiyatar=a aušta*)、私の父は私たちを呼び出して『互いを守り合います』と(神々に)誓えと言った。こうして、私の父は私たちに誓いを立てさせたのであった²⁴。

ハットゥッシリ3世はかつて、息子トゥドゥハリヤと甥にあたるクルンタに対して互いに協力して生きていくよう、神前で誓いを立てさせたのだという。クルンタはトゥドゥハリヤ4世の従兄弟であったが、二人はほとんど兄弟のような関係だったと考えられる。ハットゥッシリ3世は『弁明』の中でも、兄ムワタリの息子だったクルンタを預かって育てたと述べていることから²⁵、トゥドゥハリヤと養子同然のクルンタは幼いころから兄弟のように育った可能性がある。したがって、この文書に出てくる「愛」は「友情」、あるいは「兄弟愛」を意味していると言って良い。

さらに上の文章は、トゥドゥハリヤとクルンタの間に結ばれた条約文書の「歴史序文」と呼ばれる構成要素からの引用である。「歴史序文」とは、条約文書の冒頭で、締結に至るまでの両者の関係の推移を語るものである²⁶。これは、条約文書に法的な効力をもたせる重要な部分であるため、トゥドゥハリヤとクルンタの「愛」が語られることには強い政治的意図があったはずである。タガー・コヘンは、このような政治的な文脈における「愛」は法的な用語であると位置づけている。『青銅板文書』にみられるトゥドゥハリヤとクルンタの関係を、サムエル記におけるダビデとヨナタンの関係と重ね合わせ、いずれの例も両者の「愛」が条約あるいは契約を結ぶ法的根拠となっていることを指摘している。また、その「愛」は上下関係—ヒッタイト王トゥドゥハリヤ4世よりも辺境の国タルフンタッシャの王クルンタの方が劣る—の上に成り立つものであったとも述べている²⁷。これに類似する例に、ヒッタイト王と属国の王との条約の中では、臣下から君主への「愛」が語られることがある。トゥドゥハリヤ4世とシリア北部に位置する属国アムルの王シャウシュガムワの条約の「歴史序文」には、アムルの王がかつて「愛のある僕」だったと語られている。

KUB 23.1 i 28-36 (CTH 105.A)

私 (=トゥドゥハリヤ4世) の叔父ムワタリが王になったとき、アムルの人々は「(かつて) 我々は愛のある (ヒッタイト王の) 僕であった」(*aššiyanaš=wa=naš ÌR.MEŠ ešuen*)。しかし、今はもう僕ではない。」と言って反旗を翻した。そして彼らはエジプト国王の支配下に戻った。こうして私の叔父ムワタリとエジプト王 (=ラメセス2世) はアムルの人々をめぐって戦った²⁸。

トゥドゥハリヤ4世はここで、かつて「愛のある僕」だったシリアの属国アムルの人々が、ヒッタイトを裏切ってエジプト側に寝返ったことに言及している。別の文書では、それ以前のヒッタイト王スッピルリウマ1世の時代に、アムル王が

自主的に服従してきたことが記録されている²⁹。つまり、「愛のある」僕とは、強制的ではなく自主的にヒッタイト王に服従した従順な臣下であったことを指し、*aššiyatar* は臣下の君主に対する従順さや自発的な敬意を意味している。これは臣下から君主への一方的な感情を表しているが、両国の王が条約を結んで主従関係に至った背景を語る「歴史序文」に「愛」という語が現れていることは青銅板文書と共通している。この点で、青銅板文書にみられる「愛」と同様に、属国アムルの人々からヒッタイト王への「愛」は両者の間に法的な関係が結ばれるための根拠となっていると考えられる³⁰。

加えて、エジプトとヒッタイトの友好関係を言い表す際にも、「愛」という語が現れることがある。この場合、外交上の擬制的な兄弟関係における愛を指しており、両国の対等で友好的な関係を示すための外交用語となっている。ハットウシリ 3 世の父ムルシリ 2 世は、かつての王シュッピルリウマ 1 世の時代の、エジプトとヒッタイトの関係を次のように記述している。

KBo 14.12 iv 26-31 (CTH 40.IV.1.E₃)

そのとき、我が父 (=スッピルリウマ 1 世) は再び条約の書板に問うた。(その中では) かつてどのように嵐の神が、クルシュタマの人々、ハッティの息子たちを取り、彼らをエジプトに連れて行き、そしてエジプト人にしたかということ、また嵐の神がいかにエジプト国とハッティ国の間に条約を課したか、そしていかにそれらが永らく互いに友好であったか(*istarni=šummi aššiyanteš*) (について書かれてあった)。そして彼らが (条約の) 書板を彼らの前で読み上げた際、我が父は彼らに向かって次のように述べた。「かつてハットウシャとエジプトは互いに愛し合っていた(*istarni=šummi aššiyanteš ešir*)。今も我々としては [両国の] 間はこのようなである。ハッティ国とエジプト国は永遠に互いに友好であり続けるだろう(*istarni=šummi aššiyanteš*)！」と³¹。

ムルシリ 2 世は、かつてヒッタイトとエジプトが友好的な関係であったことを「愛」という言葉で説明している。動詞 *ašš-/aššiya-* の分詞である *aššiyant-* にはいずれも三人称複数形の接辞が伴われていることから、両国が互いに愛し合う関係として、双方向の友好的な感情が示されていると思われる。当時の中近東世界では、支配者たちが対等な関係であることを示すために「兄弟」と呼び表す慣習があった³²。スッピルリウマ 1 世以降のヒッタイト王とエジプト王は、外交上、互いを兄弟と呼ぶ対等な関係にあった。また引用文からは、当時ヒッタイトとエジプトの間に条約が結ばれていたことが示唆される。したがって、ここでの「愛」は外交用語としての兄弟愛を意味し、両国に対等かつ友好的な関係が成立していたことを示す

ための言葉である³³。

モランは、申命記における「神の愛」とその古代中近東の文化的背景を論じる中で、このような外交上の「愛」は、独立し対等な支配者間の友好関係を語るためだけではなく、宗主と属国の王の間でも良好な関係を示すために使われたのだという。その場合、宗主を愛することとは、宗主に仕え、属国の王としての身分に忠実であることであった。このような愛は、感じるものというよりはむしろ命じられるものであり、その点で申命記にみられるように「契約の愛」なのだとしている³⁴。つまり、支配者間の「愛」とは、いずれも契約を成立させるための基礎となるものといえる。

このように、支配者たちの関係を表す際に使用される「愛」とは、両者の間に契約を基にした関係が結ばれるための裏づけとなる術語である。ハットゥッシリ3世が自らの王権の座を確かなものにするために作成した、一種の王令である『弁明』で、ブドゥヘパとの「愛」が語られることに政治的な意図がなかったとは考えにくい。ヒッタイト文書における支配者あるいは国家間の関係にみる「愛」の意味を踏まえれば、彼らの「愛」も法的な用語とみなせるだろう。それはブドゥヘパを妻としてだけでなく、政治的なパートナーとして公的に王と並ぶほどの権力をもたせるための根拠であったと思われる。そのようなブドゥヘパの立場は彼女が実際に王家で果たした政治的役割と重なるものである。

6. おわりに

本稿で扱った「愛」に関連するヒッタイト語が表す男女の愛は、異性としての魅力に惹かれることであり、この感情の発露はイシュタルによるものだと語られていた。イシュタルのもたらす男女の「愛」に共通しているのは、結婚しているかどうかに関係なく、いずれも男女が異性として引き寄せられる感情であると同時に、男女の仲良く調和のとれた状態を表していることであった。一方、支配者同士の「愛」は、両者の間に法的な関係が結ばれる前提となる政治的な術語であると理解される。

ハットゥッシリ3世がブドゥヘパとの「愛」に言及した背景には、男女の愛と政治的意味での愛、いずれの意味もあったのだと考えられる。『弁明』には、ハットゥッシリをヒッタイト王の座に導いたイシュタル神を讃え、その庇護を受けた自己の王権を正当化しながら、ブドゥヘパの王妃としての地位を高める目的があっただろう。他の史料からも、ブドゥヘパが夫と並ぶほどの政治手腕を発揮していたことがわかっており、彼女には実質的に夫ハットゥッシリと並ぶほどの権力があったといえる。「私たちは結婚し、女神が我々に愛を与えた」というハットゥッシリの

言葉には、その政権において、夫と共に歩んだ王妃ブドゥヘパの存在感が表れている。

推薦者：アダ・タガー・コヘン
同志社大学神学部神学研究科教授

註

*本稿は、アカデミスト・クラウドファンディング「愛は普遍なのか 楔形文字粘土板から探る」の助成を受けて行った研究の一部である。特に、加藤義清氏、小堀馨子氏、篠原千絵氏、高部智哲氏、中山さつき氏、村上朋美氏、山本英一氏には多くのご支援をいただいた。ここに感謝の意を表する。

- ¹ Billie Jean Collins, *The Hittites and Their World* (Atlanta, Georgia: SBL Press, 2007), 99-100.
- ² ブドゥヘパはラメセス 2 世と直接書簡のやり取りをしていた。ブドゥヘパがエジプトへ送った書簡を始め、ヒッタイト王国と諸外国との書簡はホフナーが英訳している。Harry A. Hoffner, *Letters from the Hittite Kingdom* (Atlanta, Georgia: SBL Press, 2009), 281-290. また、ヒッタイトとエジプト王室間の結婚におけるブドゥヘパの役割については、プライスの概説書に簡潔にまとめられている。Trevor Bryce, *The Kingdom of the Hittites* (New York: Oxford University Press, 2005), 282.
- ³ 「タワナンナ」の位は終身の地位であったため、夫より長生きしたヒッタイト王妃が次の王の治世にもこの位にとどまることがあった。ハットウシリ 3 世とブドゥヘパの息子で王となったトゥドゥハリヤ 4 世はバビロニアの王女と結婚しており、ブドゥヘパはこの結婚にあたって交渉を主導したと思われるが、最終的にはトゥドゥハリヤ 4 世とそのバビロニア出身の妻との間に軋轢が生まれたようである。Billie Jean Collins, *The Hittites and Their World*, p.100.
- ⁴ Heinrich Otten, *Die Apologie Hattusilis III: Das Bild der Überlieferung* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz), 1981.; Theo P. J. van den Hout “Apology of Hattušili III,” in *The Context of Scripture, Vol. I* (William W. Hallo ed.; Leiden, New York and Köln: Brill, 1997), 199-204.
- ⁵ インパーラティは、ハットウシリ 3 世が息子トゥドゥハリヤを後継者として指名することを目的に作成したものと指摘している。Fiorella Imparati, “Apology of Hattusili III or Designation of his Successor?,” in *Studio historiae ardens. Ancient Near Eastern Studies Presented to Philo H. J. Houwink ten Cate on the Occasion of his 65th Birthday* (Theo P. J. van den Hout and Johan de Roos, eds., Leiden: NINO, 1995), 143-158. 一方、ファン・デン・ハウトは、ハットウシリ 3 世がイシュタルの祭儀を主導していくことを表明するという目的があったとしている。Theo P. J. van den Hout, *The Purity of Kingship: An Edition of CTH 569 and Related Hittite Oracle Inquiries of Tudhaliya IV* (Leiden, Boston, and Cologne: Brill, 1998), 62. Trevor Bryce, *The Kingdom of the Hittites*, pp.455-456, n.3 も参照されたい。
- ⁶ Jaan Puhvel, *Hittite Etymological Dictionary Vol. 1* (Berlin, New York and Amsterdam: Mouton Publishers, 1984), 189.

- ⁷ Alwin Kloekhorst, *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon* (Leiden and Boston: Brill, 2008), 215-216.
- ⁸ この説明の以下、*aššiyawar* が宗教的文脈で現れる用例が列挙されている。Johannes Friedrich and Annelies Kammenhuber, *Hethitisches Wörterbuch I* (second edition, Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1975ff.), 403.
- ⁹ HW² I: 403-404. 上記の分類に加えて、フリ語・ヒッタイト語文書の例も一例挙げられている(KUB 39.97+45.28+47.59+ obv.9)。
- ¹⁰ たとえば、Fiorella Imparati, “Apology of Hattusili III or Designation of his Successor?” pp.143-158.
- ¹¹ 翻訳は Theo P. J. van den Hout, “Apology of Hattušili III,” p.202 に従っている。なお、本稿で引用する文書は、ハットゥシヤ出土の文書を刊行した *Keilschrifttexte aus Boghazköi*, Leipzig and Berlin. [KBo] と *Keilschrifturkunden aus Boghazköy*, Berlin. [KUB] という二つのシリーズに掲載されている粘土板番号を示している。また、各文書のジャンル分けを行なっているヒッタイト文書カタログ(CTH)の番号も併記した。使用した CTH 番号は Silvin Košak and Gefrid G. W. Müller, *Hethitologie Portal Mainz* (2019/07/02) <http://www.hethport.uni-wuerzburg.de/CTH/> に基づいている。引用文中のアルファベット翻字の表記は、大文字がシュメール語表語文字（シュメログラム）を、大文字斜体がアッカド語（アッカドグラム）、小文字斜体がヒッタイト語を表している。翻字の記号については、[] は欠損した粘土板の復元された箇所、…は原文が判読できないか翻訳不可能な箇所である。翻訳にあたっては、欠損した部分には [] を用い、翻訳不可能な箇所は…で示した。また、翻訳では原文にない語を補う場合には () を用い、固有名詞等に補足説明を挿入する際は (=) として示している。最後に、本稿ではシカゴ・ヒッタイト辞書 *The Hittite Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Chicago, 1980ff. については、CHD と略して示している。
- ¹² イシュタルと多くの共通の特徴をもつフリの女神シャウシュガは、ヒッタイト新王国時代、特にこの女神を個人神としたハットゥッシリ 3 世の時代から重視されるようになった。シャウシュガはイシュタルと同様、愛と戦争の女神であり、またその役割に応じて半男半女の性質があった。この女神の祭儀はアナトリア南部とシリア北部にあるが、ハットゥッシリがムワタリ 2 世から統治を委ねられていたアナトリア北部の都市サムハも祭儀の中心地となっていた。シャウシュガについては以下を参照されたい。Manfred Hutter, “Shaushka,” in *Dictionary of Deities and Demons in the Bible* (Karel van der, Bob Becking and Pieter W. van der Horst eds., Atlanta, Georgia: SBL Press, 1995), 1433-1434. シャウシュガの特質はとりわけ「ニネヴェのイシュタル」と共通していることから、シャウシュガとニネヴェのイシュタルは同一視されていたと考えられる。ニネヴェのイシュタルは、ニネヴェがあるアッシリアだけでなく、その周辺地でも信仰されていた。ニネヴェのイシュタルについては以下を参照されたい。Gary M. Beckman, “Ištar of Nineveh Reconsidered,” *Journal of Cuneiform Studies* 50 (1998), 1-10. なお、ハットゥッシリ 3 世の個人神であるこの女神について、本文中では「イシュタル」に統一して表記している。

- ¹³ 動詞 *handai*-の意味については以下を参照されたい。Jaan Puhvel, *Hittite Etymological Dictionary Vol. 3* (Berlin, New York and Amsterdam: Mouton Publishers, 1991), 96-107.
- ¹⁴ ヒッタイト語における結婚に関連する表現については、山本孟『ヒッタイト王国の政治と外交—条約と結婚による関係構築—』博士論文、2017年、61-77頁を参照されたい。
- ¹⁵ 翻訳は Harry A. Hoffner, *Letters from the Hittite Kingdom*, p.287 に従う。
- ¹⁶ 新王国時代においてアリンナの太陽女神は王権を司る女神であり、王と王妃はこの太陽女神の神官でもあった。ビン・ヌンは、王家がアリンナの太陽女神を重視するようになったのは、この女神をヘパトと同一視するフリ人の影響が強いと考えている。そのような傾向はフリ人の文化圏であるキズワトナ出身のブドゥヘパが王妃となったハットゥシリ 3 世の時代に非常に強まったとしている。Shoshana R. Bin-Nun, *The Tawananna in the Hittite Kingdom* (Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1975), 204-206.
- ¹⁷ 翻訳は Harry A. Hoffner, *Hittite Myths* (second edition, Atlanta, Georgia: SBL Press, 1998), 54 に従う。
- ¹⁸ 翻訳は Harry A. Hoffner, *Hittite Myths*, p.55 に従う。引用文中に現れる *šahi*-と *parnulliš*-という語は、いずれも植物性の香料を指すと考えられる。これらの語については、CHD-Š: 8 および CHD-P: 179 を参照されたい。
- ¹⁹ フッターは、イシュタルと同一視されるフリの女神シャウシュガの戦争に関係する特徴は、その愛を司るという役割にも影響を与えているという。シャウシュガは調和と夫婦の愛を高める役割があるとされながらも、いくつかの文書ではその（性）愛は予期できないものと見なされ、かつ危険なもので見なされる場合があることを指摘している。Manfred Hutter, “Shaushka,” p.1433.
- ²⁰ Hans G. Güterbock, “A Hurro-Hittite Hymn to Ishtar,” *Journal of the American Oriental Society* 103 (1983), 157; 161.
- ²¹ Hans G. Güterbock, “A Hurro-Hittite Hymn to Ishtar,” p.164. 「町の住民を眠らせ、男を隠し、誰も聞くことはない」という表現は、イシュタルが周りの人々から恋人たちの性行為を隠すのだということを示していると思われる。
- ²² ギューターブックは「花嫁たちは調和していた（ので）、彼女らは機を織り続けた。家の息子たちは調和していた（ので）、彼らは一区画で畑を耕し続けた。」としている [Hans G. Güterbock, “A Hurro-Hittite Hymn to Ishtar,” p.156] が、ここではプーヴェルの解釈に従っている [Jaan Puhvel, *Hittite Etymological Dictionary Vol. 3*, p.100]。
- ²³ クルンタはムワタリ 2 世の息子であり、ハットゥシリによって王位を奪われたウルヒ・テシュブの兄弟である。ハットゥシリ 3 世にとっては甥にあたる。ハットゥシリ 3 世は、クルンタをアナトリア南部のタルフンタッシャ国の王に任命していた。
- ²⁴ 翻訳は Heinrich Otten, *Die Bronzetafel aus Boğazköy* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1988), 18-19 に従う。なお、『青銅板文書』は KBo・KUB シリーズには掲載されていないため、書板の登録番号で示している。
- ²⁵ Theo P. J. van den Hout, “Apology of Hattušili III,” p.204 (§12b).

-
- ²⁶ アルトマンは、ヒッタイト条約文書における各「歴史序文」の内容を挙げ、それらを類型化し、「歴史序文」の役割を整理している。Amnon Altman, *The Historical Prologue of the Hittite Vassal Treaties* (Ramat-Gan: Bar-Ilan University Press, 2004).
- ²⁷ Ada Taggar-Cohen, “Political Loyalty in the Biblical Account of 1 Samuel XX-XXII in the Light of Hittite Texts,” *Vetus Testamentum* 55 (2005), 257-258.
- ²⁸ 翻訳は Gary M. Beckman, *Hittite Diplomatic Texts* (second edition, Atlanta, Georgia: SBL Press, 1999), 103-107 に従う。
- ²⁹ スッピルリウマ 1 世とアムル王アジルの「条約序文」には、アジルが自主的にヒッタイト王に服従したということが記されている。Gary M. Beckman, *Hittite Diplomatic Texts*, pp.36-41.
- ³⁰ タガー・コヘンは、ヒッタイト王と属国の王の条約では属国の王がヒッタイト王に忠誠の誓いを立てているが、『青銅板文書』ではトゥドゥハリヤ 4 世とクルンタの両者が誓いを立てている点で差異があるものの、いずれも両者が条約を結ぶ際の法的根拠であったとしている。Ada Taggar-Cohen, “Political Loyalty in the Biblical Account of 1 Samuel XX-XXII in the Light of Hittite Texts,” pp.266-267.
- ³¹ 翻訳は Hans G. Güterbock, “The Deeds of Suppiluliuma as told by his Son, Mursili II,” *Journal of Cuneiform Studies* 10 (1956), 98 に従う。
- ³² 紀元前 2 千年紀後半の中近東世界ではエジプトやミタンニ、バビロニア、ヒッタイトなど、属国を従える大国の支配者が対等な関係の下に外交関係を結ぶことがあった。彼らは「大王」を名乗り、友好関係にある相手を「兄弟」と呼んで擬制的な兄弟関係によって対等な立場を示していた。山本孟「ヒッタイト王家の家族観とその外交への適用」『西南アジア研究』第 82 巻、2015 年、西南アジア研究会、1-16 頁を参照された。また、古代中近東の支配者たちの外交上の兄弟関係については以下を参照された。Amanda H. Podany, *Brotherhood of Kings: How International Relations Shaped the Ancient Near East* (New York: Oxford Press, 2010).
- ³³ 前 14 世紀前半のアマルナ書簡(EA19)では、エジプトとミタンニの間の書簡で、両国の王の関係として「愛」に言及されることがある。William L. Moran, *The Amarna Letters*. (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1992), 43-46.
- ³⁴ William L. Moran, “The Ancient Near Eastern Background of the Love of God in Deuteronomy,” *The Catholic Biblical Quarterly* 25 (1963), 79; 81-82.